

俳諧而形集

卷二	天文	句	目録	凡例	序
地輿	節序				

中村俊定文庫
 文庫 18
 482
 1





俳諧而形集序



夫鳧脰雖短。續之則長。鶴脰雖長。斷之則悲。言物各有性也。若因其性。則有成。違此反失焉。蓋平砂其父以醫為業。嘗講程朱之學。

於人見氏也。平砂甫九歲。父授之毛詩。未成。其明年父卒而孤。猶讀父之書。又不肯竟學。三十而師學貞祐。得成今業。遂褒然播聲於四方。故播紳聖士。從遊

日進。自享保迄于明和。四十年間。其興感之所寓。及應求諸作。若千萬言。非獨著述之富。大務衆人也。而以此業師居之。亦多出其門矣。嘗數移所居。及丑

罹於祝融。皆親履稿以去。故能均完存善。平砂自初年逼棗榆。不能無朝露之懼。自矜以其行。纂為二十卷。述作之体。無不備具焉。雖異乎大雅之撰。而望補

風教。蓋亦一家之云也。其詞鄙俚而近事情者。俳諧所本。斯之為美。可謂得里巷歌謠之體也。夫文貴雅馴。枚舉束皙。猶好嫺戲。而後人或學其流。亦各從其

所好也。名曰而形集。子夏
 始序曰。情動於中而形於
 云。取於此語者。意在過庭
 之訓。拳服膺。可見哀慕
 固極也。業之成也。固因其
 性。而所以成之志遠矣。余

戚然有感。故為之序。平石
 姓。名良珍。字友叔。号衆
 山。又號解菴。
 明和辛卯之春。楊江子識



--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

同

嗚乎解菴老叟也者詞林
 之魁楚哉遠繼蕉翁之風
 近效桀之畔之宏寸願志
 之高尚也拂衣謝世累負
 笈拽節勝境名區之流物

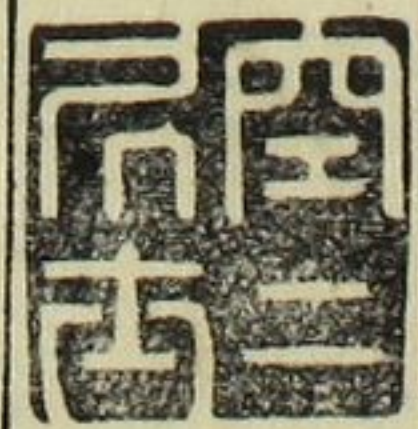
月八日行
 平石齋序
 卷之
 平石齋

遍未為慕其風致握手於
 閑花之林然有一技之不可
 廢而參商之濶之十年于
 此叟年已老矣又過杖鄉
 近少編輯多年所吐之琳
 瑯而刊之名曰而形教書

已就矣是彼之異衆人情
 彩之篤不遺故舊以併需
 張言愴之至于此所不弱也
 甫前有楊江先生之文及
 自序吾復何云乎且也老
 懶日益百子遺忘僅臆記

末曲あり句頼以列巻之端
臨援筆之時遺失苦夢再
按所記竟任其多可嘆也
書之以為贈以和壬辰春日

師道識



有常なきありしるしもま中終のあはれ
より夫の移志の悔あり 既中終なる人の世の
あはれもなきありしるしる志の 一かをわづ
らふもなうこのなるそあさ たりたも
年あれと忘れうこあはれありき
泉のありし 能得のまきあふ名こく物志あひり
るるりしははたりしるし 能得は乃
しあはれこくしと 能得は乃しと
はれはれこくしと 能得は乃しと
るらるるの人もあはれしるし 能得は乃しと
くしるの月もあはれしるし 能得は乃しと

あやをこの一むふありゆらぬあや一箇又
こつこのる又何くれのこつこかこ梓りち
つこあこせふあ一まかこ一こをさの中へ
くこ今こあれむう一のこここここあれぬ志
るまこふこ家郭こここここ

倚翠庵

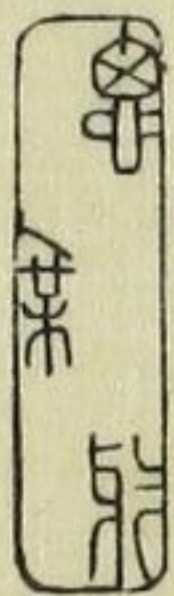
松軒

こつここここここここ

こつここここここここ

こつここここここここ

而形集題辭



陸放翁破曉一聲，婆餅焦。晉惠帝聞蠅

問臣。賈胤曰。爲官鼃。何う哥を詠さうらうら

花晨月夕如宴。皆物子あき時子從いて

言出せるあき。抑古々集雜體。然菟玖

波集子。俳諧體を撰入あり。よき已來

其餘風今子傳て如此。万葉集成、続日本

三ノ下ノ行 万葉集云 八 三ノ下ノ行

紀小冬。哥を乞。詩を以。爲。李。毛。詩。因。風。周。南。第一。曰。詩。者。志。之。所。之。也。今。時。如。能。諧。八。和。漢。を。溷。合。し。て。祭。起。せ。道。也。爰。不。柔。々。畔。貞。佐。門。人。多。々。中。小。慕。風。經。塵。爲。業。者。纔。閑。花。林。平。砂。一。人。殘。ま。り。狀。享。保。中。と。字。四。十。余。年。平。叟。獨。吟。句。於。園。字。文。章。新。版。一。印。一。行。名。曰。而。形。集。吾。聞。

業平、體貌閑靜、放縱不拘、略無ホ女孛善作ル和哥ヲ比ス之ニ、あらとと貞佐、其自カ門葉多ク、文事ノ不レ可ク、能諧ル如ク妙手ノ也。余亦貞佐、門ノ下ニ、能諧ル小遊ラ事年ハ可ク尤モ平砂ヲをレ知ル、夏久シ、故ニ應ル需ニ題辭ス。吾ガ友、古老百菴ノ筆ヲを採リ、一ト多ク人ト乞フ相老シ、如ク思フ人ノ事ヲを耻シ、因幡山ノ乃

以_レ南_レ心_レ以_レ和_レと。往昔定家郷乃拾遺
愚草を。他如筆を以_テか_レ一_レ免_レん
例を_レ知_レる_レ花_レ彼_レ不_レ安_レは_レる_レ處_レて_レ清_レ春_レさ_レ路_レ一_レ免_レ。

與_ニ平叟_ニ云爾

柳緑陰管鳳翠



刻俳諧而形集序

る_レ俳_レ諧_レ用

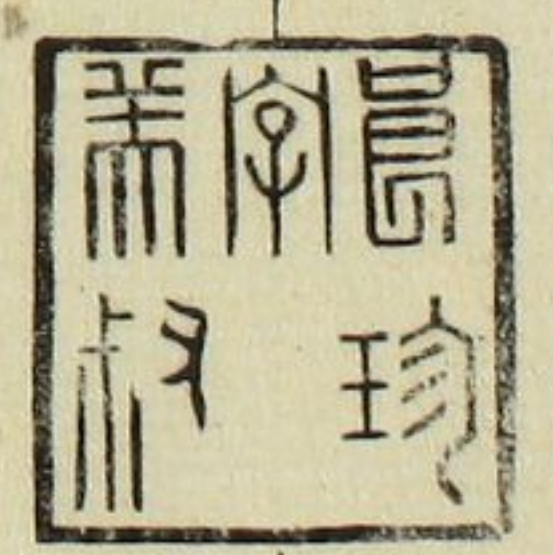
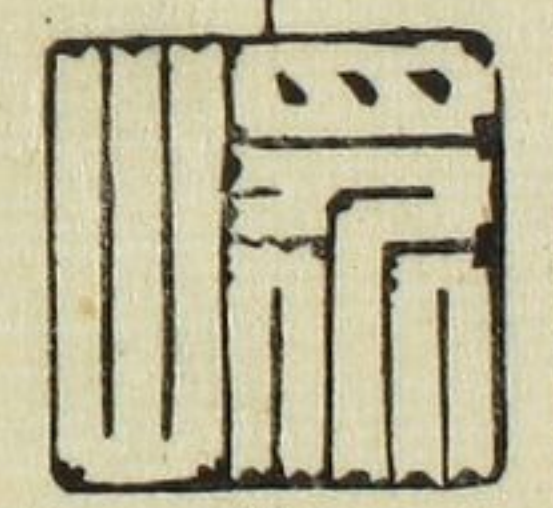
年_ニ草舎_ニ来遊_ヘる_レ雅客門人予_ニ裁句作文の口實_ヲを知
む_ニ數章_ヲを寫_ス一_レめ_ニ一篇_ノ校書_ヲ志_ス或_ハ草稿_ヲを_レ見_ルま_レす_ハ
深_ク知_ル尽_スと_レむ_ニと_レち_レり<sub>皆_レ知_ルぬ_レ應_テて_レ他_日の責_ヲ校_ヲ塞_キま_レぬ
去年_ノの稿_ヲを_レ定_メ一_レ淨書_一竣_ル日_ニあ_リま_シて_レ全_クを_レ寫_スに_レ及_ス
以_テる_レ猶_レ晩_ニ齡_ヲを_レ慰_ムむ_ニる_レお_レの_レ孫_ヲを_レく_ハこれ_ヲを_レ木_ニ刻_シ
帙_ニ一_レ諸_門人_ノ家_ニ藏_スて_レ數_ニ歳_ニ成_功の辛_苦を_レ忘_ルれ_レ老_後
乃_レ宿_志を_レの_レ滿_メぬ_ヘし_と二_三子_ニを_レ謙_シよ_リ各_ノ許_諾し_レ相_興す</sub>

工を資く志のこ那らま名家の博愛も良友の實交
 れれもも同く潤色の佳味を賜ひ修補の嘉惠を蒙ふ至る是
 故も去年庚寅の夏も今茲辛卯の冬も及ふと九百八十餘紙
 削刷氏の功遂も成ぬ粵に客有て曰此選惜むく繁し
 と予曰事の繁き也辞の繁た也事ハ五十年ハ向つり辞も
 亦こも又随ふ繁らすて何れを変て除かん予り選らぬ
 非ず省きて人意を快くせむ尋常に選ばれぬへし
 夫詞ハ極まく才ハ盡る処也然らん限ある才を短くて

極まく詞を定めん彼を取是枚捨をのれ精選すもも人
 も衆人の口ハ唱へ志めむことに決まて興ねしらんや
 ことより予の躬み俚言を流れ雅言を學ぶ乃時を失ひ
 ありハ楊江林公の序しままへる如く後も自謂る
 ありし也むことを裁えざるの情も動き出たる其言を
 形もならず是選せらるる処也以て客默ある去是於て
 寵貶の珠玉をあらめ類を分て附刺務しむ今也砂の
 俳諧の底裁もすれも門生ハ愈加覽て吾老興淺し

と忽る説破らむさあれ若書淫有て稗説夜話の一
に加を我立言の意裁さともかちと言へらるる乃

明和八年辛卯十一月冬至日 衆山皐月平砂題



俳諧而形集凡例

- 一 此編は享保七年壬寅の春より今迄明和七年庚寅の夏まで
凡四十九年の間予巧作せし文の詞ありあは人のこゝろおほに
よきあり物も感あてなるよりて歌詠も多少あり文體も亦れ
に同じ今形も増益せず草稿のまゝに門類をわけて旦暮も
見やすかりん便とすすめり
- 一 一句句の風体や弱年の時乃譬喩辨よをてほへるの變風も
從ひる衰老の苦吟も及ぶをたも載て残すもあは故小
齋裁ひしりかへ
- 一 句中より引用したる和歌物語の詞或は詩句文辭未を附記し

たる。其趣意の按て来る処。字眼のちる處に。自送忘の備とせし也。と句乃下は分注してこれら證とす。

一句前は小序有しとの。今まゆを略記して。句の下は細書を。法まこと至要なるもの。字行亦均くして句あははぬ。

一句の下に記す諸家姓名。後亦おもむくもの。其句作はる時の必を以寸出を強て改めん。かひして。事實の討詰たるを。辨疑き事あねを也。中小同人異名。て出たるも。ある人ありて。うらむあらうん歎。

一句をさひ詞をばやし人。他乃人よりて命し。又ハ消息あきいふ。其姓名在亦詳ある。さるもの。きく。傍に記したる。

の。又或人を以称する者。皆要結に出せり。と。

一漢句ハ。歴年の間同好。人少く。附向ハ。日に唱和乃友を。傳教なき。漢句ハ。篋底の。ころ。あまぬ。付向ハ。席上は。散。傳。小拾ひ。毎に類して。倭漢長短の對偶と。あね。

一文章。句巧成の餘力。出。は。歳。これ。恥。恥。等。あり。て。新。席。を。設。け。會。集。志。て。力。を。励。ま。す。と。あ。る。と。あ。や。う。と。あ。な。り。た。け。あ。る。予。の。詞。も。あ。つ。う。あ。累。と。ぬ。人。の。踏。り。た。る。体。の。外。ハ。皆。加。の。選。場。の。殘。篇。たり。

一文體。序次ハ。徐伯曹の文。體。明。辨。を。準。則。と。して。作。為。せ。る。記。を。列。す。

一 鄙歌ハ鄙語の和歌と志て初て許六の文選の如くいふかよそ
 狂歌の作をまぬれまといふも秀句の新劇を遊て狂て狂
 せざるが差別ハ実によやまらなまきにあらはれとよりの字救
 乃和歌まかりし物も今は篇の首おせせと法格の倭なるを
 揚ケ 歌謡乃先なるふあろるゆ而已

一 國語詩や此体支考を始とす假名の詩とまつけて文鑑もみせ
 ま名の詩とよひて文標のみすおりに依借文字の体をつら
 秘んま此詩故めて彼代て諸文集のさま城うつら
 創立の功をかめしむやあつたみせとせら假名の詩と
 いちんハ正しから先と真名の詩と称せんといふ名義は控て

いふくく守や詩ハもとより真字をねを也よるて今俗語詩
 といふくれば雅語俗云のわいふめなれを左氏の撰乃書名
 をよりて各國の語をんまハ詞をえらるをあるのさあれを
 きて新ハ國語詩と標し偽字をまぢ二つを以てからく
 此體の名ともやり此詩や享保元文の間東都の詞人群を
 て学ひるん物をとらうに玩ひし事ありた予も又も席に
 臨きてともかこれら交りてせしめらるのまをさるを
 出して今斯篇の一体も加ふ

一 箴ハ明辨曰大抵皆用韻語と因て戲謔箴を他りに偽字の韻
 を用也先を韻語の格をあきらめ始て試み言を立

一銘於賛款の中、係字去字の二体あり、其器を悉くして書様を定め、これを以て真と偽とす。故に品別を以てして記す。中より又言ひく二句あり、公通公の脚句ありふ。

一文章の後より二句を附し、二句を附し、或は加の文乃末に詩ありふ象。其句悉發り部を載て、下は注して有文出文章篇といひ重ねて又其文の末より是結語の勢を助ん也。

一文章篇の中辭類を闕すと云ふ、ことより意ありて他らされたり。以て朱子楚辭後語の序、又明解の楚辭類を讀て決す、これを引證す。或前書小歎と云ふ、或に漏ラセらるるをのほり。

一通篇淨書不用假名遣ハ、悉行阿の書に倣ふ、近來仮名遣を

習ふ人、かの日本紀古事記萬葉集等古訓を抜出し、書法をのぞめ、一みだりて、他集の如くを改め寫せりとも、或れと今古紛雜して全かり、他階、具起の頃より、今の書法を以て來れを、通例をより、て自書を、嗚呼眼老り、花をこれハ多かりあり、寸月、邊別、月を、字字暈し、行行歪む、ナガ黠、メカ子明を得て繕寫すて成ぬ、或るは、差謬多かり、或るは、

一所著作發句分門二十有一、總數四千一百有八句、加漢第唱句三十句、附句四十有三句、漢對句三句、通計四千一百八十有四句、○文章二十有六體之中、鄙歌二十有四首、國語詩十有一首、諸體合一百六十五篇、通計二百篇、凡例終

俳諧而形集目錄

卷之一 發句

天文門 天日月星雲風雨雪
雷電霧虹旁煙乃類

卷之二 發句

節序門 春夏秋冬の節令公事
佛子又風俗行幸乃類

卷之三 發句

地輿門 山嶽水江海林野
名の類

卷之四 發句

神祇門 非社奉納乃類
社系御子姑類

卷之五 發句

釋教門 佛菩薩天部等堂内を納る寺觀也
彫偶他類俗家乃り事及具の類

卷之六 發句

人倫門 家傳乃る人品の類
同四季にわたり類

卷之七 發句

人事門 口々分一 謁見 初てまゑ
初てまゑ 相會 乃る類 尋訪

唱和 口々分一 謝惠 礼を以て
口々分一 稱譽 乃る類

慶賀 延生哈初元振名を以て
入學婚礼出進新宅

利發 隱居 幸を以て
表は号を以て 名を以て 名を以て

初と云ふおさめ 縁業竟宴 法の句体句教といは
万句の云集冊子ホあり 哀悼 乃る類

古き筆の詠也て 乃る類 二 勤學 乃る類
抄書 乃る類 書畫 乃る類 圖畫 乃る類

三 送別 旅行を
行記 教度の旅日記を以て
遊眺 乃る類

嗜飲 酒茶又
麗情 乃る類 述懷 乃る類

懷舊 古人を以て
乃る類

卷之八 發句

居處門 他の居宅といひ
自小令を以て 飲食門 會地乃る類

衣服門 衣類 乃る類 器用門 乃具の類

卷之九 發句

飛禽門 鳥の類 乃る類 走獸門 けもの類 乃る類

鱗介門 魚貝の類 乃る類 昆蟲門 虫の類 乃る類

卷之十 發句

米穀門 たかひのたか

菜蔬門 くさひのたか

果蓏門 このころもりのたか

草卉門 あはれたか

樹竹門 木のたか

雜體門 物名折句 沓冠 廻文章 季本説

本秋 遙抄 季双 世活 對句 組和 補き

漢 第唱句 ○附句 ○漢 對句

卷之十一 文章

鄙歌 賦 國語詩

書記 論 說

辨 解

卷之十二 文章

序 小序

題跋 題。跋 書。讀

卷之十三 文章

文 雜著

卷之十四 文章

箴 銘

卷之十五 文章

頌 贊

卷之十六 文章

記一

引

門人刊行
而形集目錄
三
平石齋

卷之十七 文章

記二 字說附名說 行狀

傳

卷之十八 文章

哀辭

卷之十九 文章

祭文 弔文

卷之二十 文章

祝辭 自序

附錄諸家發句第
唱句文章

俳諧而形集目錄終

俳諧而形集卷之一

東都 解庵 皐月平砂 著

發句

天文門

天

春わかみ地に貸^入と^り乃^り矣^と里^に加^那
天心^{ふむ}へ^ほと^と寸^さ色^をあ^し
かめ^て垂^和清^乃天^地馳^走交

日

は^あし^こ出^る日^や表^を為^す一^里陽^朝

三少行 天文 三少

平沙行 平沙集 平沙行 平沙集

試小師走の松乃朝日同南同花影日

日結華や老にたまち遠花影日

花とも多雞卵招く西日言斜日

裏の日に風袋おそし山加つら言春日

杳足袋乃笠若ぬ夏至の日出し言夏日霧間か赤言秋日

志けし言日乃寝ま霧間か赤言秋日

茸平やあらし言日乃寝ま霧間か赤言秋日

水栗の出来てやは秋日乃日如鳥同

いつとむく言日乃寝ま霧間か赤言秋日

冬の日乃低さ言日乃寝ま霧間か赤言秋日

我も亦く言日乃寝ま霧間か赤言秋日

棒珪日賦日煖
千林而花發

月

夕栄を清く言日乃寝ま霧間か赤言秋日

以殿を三棟言日乃寝ま霧間か赤言秋日

宮守也其時言日乃寝ま霧間か赤言秋日

影あま言日乃寝ま霧間か赤言秋日

茅原に言日乃寝ま霧間か赤言秋日

三日月也照言日乃寝ま霧間か赤言秋日

引起寸新言日乃寝ま霧間か赤言秋日

天文 三少歳

有明の月也荒男乃眉於反同

翳にかさききぬ雪霞むや月乃顔言春

暈カサかさに透スグ背もろしに同かろ月同

秋蕙て蛤涌らんお保海月同

ふくまろへ夏於存秋移子乃閏言夏

大潮に沓故あま秋の月言秋

言の葉於裸雪よ々礼ふ於乃月言冬

繪於さまに訝てよりお望月の中同

汐風子水色まさる月夜かな言海

三時かそ月をちいさし沖の上同

名月やちれて雪本々乃虫らひ葉寶曆八乙

月十五夜を月蝕亥二刻て他

星

何志於く雪乃海なるほの垣

冬ろらや夏又ぬかしを霄於うち

ゆくや年ほへ城座鉄カサみ磨ウスの米言北

あゝをせや北斗印のへ引柄杓言七

明星や於きあき秋も切らちかと明啓

時うつ涼丹庚王や寸を象罽言昂

ひろき雪を寸を象罽言昂

序れ改教如らす紀星や小田乃暮言
秋多さ我星の林も酒言酒星與寵言都伊星
流星やいあつま海て一カ言星流鉤

雲

雲吹て世ハ息長一春乃山言春雲
浮雲の倦てやわら我日行長さ同
序ちあひをふつりやの峰言夏
うしろるよ多柳引もあまを峰同
二つめ北崩まやすさよるものみね同
洞乃薨言まをゆしを舟若言

宿中乃河き地あさくや久毛結峰同

風鳥のとまり所や雲乃峰同

象鼻にうけとほ月やを結峰同

白馬の泡よるうりや雲乃峰同 擧言雲言從馬

かけ紙のお齋言もいつこそ雲の家同 不言遇言 訪言僧言

まゝ人々苦笑ひきりもも妙言 補言

雲叢峰たさ那き時の觀物言 同

風

おちの女に実の入を思よあり 蕪言 春風言
空はくして身小帯よそや雲乃妙同

春冷や田乃雪おははら波

同

不のくき風乃加あや琴の

言薰風

者舜彈五絃之琴造南風之詩曰

南風之薰兮可以解吾民之愠兮

萬葉集

加不敷ちり石城落糸の伊香保風

同萬葉集

伊香保可是布久日布加奴日安里登伊

倍舒安我古非能未思等伎奈可里家利夫木集

椎み系小飢くち及乃風表

言俊哥

く出ゆ中乃思の凡おもて

言秋

秋風や五尺の人をさき寸さむ

同萬葉集

あきかせや尺蠖のゆし

同萬葉集

郎女歌 人事繁哉君乎二

鞆之家乎隔而恋乍將座

傘乃裂て野分のちりめか風

追分へわのれりこなふのわき

百姓の口ふ里にきく野分手那

木枯や松よ告て通流乃

松冷や互ふを濁支鐘乃音

雨

お降やををあめてあく簾

雲雨やけを子音せぬ箕乃動き

平夕川行 而集卷一 天文 三 平少藏

ち依さめや休まぬ蟻の背に膏膏同文選春

切芝を片にゆく舟や春の雨同

雨きくてうねちあちち一町續き言花降

雨とのぬれや五蓋の松妨星雨言梅

さみしきに橋場乃浮洲をまれば同

元船の焚火とも乾やさつきあめ同

雷此こひいき時り五月同

上賀茂の芝波あらん五月同

傘張の涼かかれや五月空同

水底乃橋を枝折や云る面同

出梅乃説以ふ人欠アヒヒきく人多眠ニ

此の又時的那ぬに落着き

問答をひまのあゆりや梅も此明ケ

一日新雨雲乃根や虎言虎之

ゆふたちやぬき志かす私て笑ひ顔言白

白雨を忘つめて漏や川簀垣同

かゝるや鼠追へあぬきねすみ同

夕立也足手にかゝむ猫乃同。時友六

楓尔りめく熟葉や露時雨言秋

平沙子行 雨形集卷一 天文 下 三少歳

産剃乃音香かく依去くれ言冬雨也

蛤や紙燭出む同ふ初時雨

鳥の毛み筑小拵よくや初志くれ同

一日の曇をもいふ時ふ妙同

時雨月岡面尔おけけなりのあを同

晦日から荒神松に志多れか同

まぢらぬ河原の鳥飛の吹をらし同

故柳巷乃庵梯子此上若壁を穿ち

て明を引不日々升降乃便よらし

名て時雨窓と寸三句を得きり

暑いとて破里一窓の志くらき哉

志久尚やまゝ戸此出来ぬ窓乃前

窓明て多額進き一と被の糸以上故柳巷吟

菩提子の生をかりへ依晴の糸言冬雨

濁酒鐘禮袿雲を酔を勢家里同

弦月弦角枝かきりやむ同くれ

松乃陰膳言冬雨は痒起志くれ同如

雪

中ぢらるふり之ほゆきれ濁の志

拵きの日やはらぬ馬の志時那里

卷めとせ雪跡中ゆくはむし風
まよあいのさすゝにまゝ雪之もり
かつまはたをてをあゝいふ雪れさ肉
眼の慾ハみか埋をれて雪見られ
はめらせて臺笠をこ次雪見か奈
よふ^呼者^来のく^来に極めて由は見えぬ
大雪跡大名道具名を平々り
志実を屏風おとて雪見の那
初雪や貢ときけを冥加錢^{言初雪}
ちの雪や女すゝゝに神酒上人^同

まゆゆきや破るおとる愛姑^同
掃よせろくろふてをく深雪^{言深雪}
枯芝乃起て助よりゆきまろ^{雪中遊}
棚橋や雪ころち^{言橋}なき^{言雪}
晴ふ日やあきも^{言山}の山に^{言雪}
初雪や足高山の如く^同
元山をなめ久しき深雪^同
志ろ加祿の錆に^同
一たのみ雪のたよりや^同
りのまくに雪も^同

雪ちれやまを休む汐曇同

松風やなごのを雪を指なうら言松

と敷きて竹乃もてな寸雪尺加言竹

大竹や雪の貢此たもふさ波同

鳥穀を所ちちめや屋根の雪

初雪の縁あし物や甲斐駿河

吹入を六の花尺や戸のひ川み甲戌年臘二大雪

初雪を末ふと乃深み哉日丑年臘廿一

○春雪 附春巽

惠方から脚てをくろし雪の道日卯年

くれはゆき霞の綱をぬけかから

初買の沓を有覧と乃雪

右二句元文己未年正月二日雪

柴此戸も枯木を不置賣乃雪

寒菊乃菊柴に雪の笠巻をん

右二句延享丁卯年正月廿六日雪

やふ入乃伯母と忘らほや雪の犬

花散てほし雪や物相ひ

右二句寛延元年戊辰三月十四日雪

二度に降雪や睦月の鏡踊

三少

雷よかまをぬき地の虫かち

右二句 審暦乙亥年正月朔雪又廿八日

雪不止申刻雷始疾也

あまのりともみそれり形やかたり炭

右審暦己卯年正月三日霰

○残雪

惜むおぢあきま膚にのと熟ゆま

草黄ツ物乃あま押てせ跡は雪

○雪解

姫貝の山乃雪留めひのめ哉

霜

踏志めぬ蹄を霜の厚みかち

きく霜の一子斧あは木乃根の籠

薄霜のあきみ跡しぬふの霜

柏槇乃きくき不や志堂をしら

新下の泊りに貸也霜柱

霰

白杵のちくんにねふ霰かち

櫛乃樹か一ちみ片くあら袴りれ

ぬ熟阿ら連立のふほく跡乃られち

震

目に及えぬみとせをふふ小鳥可奇

電 寛延三年庚午四月下三雨冰降

歩の止て控のわの紫乃うれ々り

露 實井子乃雜談耳露と云題を論

をき所と梅翁の白露や雪分別なる

心作を不面けふ古人の活眼を恐

を後予記すやむとヤのて蒙

白露やそ名を闇の引くの神

とく片の乃末や鬼此耳の垢

白雪や前裁市乃埃の上

丹志乃にわろほやはゆれうらおもて

雷

豆の音初かみなりとなり小なり

なる神や春のうきさちと夏一度

電 和名鈔曰伊奈比一云伊奈豆萬

あありひのひ引や初乃いなむなり

きあらく起結雲の序やいなむ初言

いまつまにけれてこをみは山の空

綿安子又よや回守のわらひ顔

ハ那片まやそらのまま夜ハあゝ小ぢふ
稻妻の升組初は田面加南

いなづまの割あまの霞月

伊奈お海乃まみくゆくや小田のあゝ

船妻ハ一盃鷺の眠アゝあ

霞和名鈔曰唐前云霞赤氣雲也和名
霞加須美題林抄冠解季吟翁曰霞を
赤の口つけあつてミゆ赤き雲氣を也詩ハ
霞光曙後殷於火モ作ア火色ハことく
赤ハといつり志ハも歌小みりりアアよ
ミくはちりミく或ハ此字訓を疑ハよりて
示寸ハ又あつた

馬工郎の輪に紫まハき加すみゝあ

慈帆乃貧しくみしぬあゝあ

何杯の松ハむ深山登一ハ吹

入海此小ととろゆのハ重霞

むつうくわすとの曲於山田加ハ

竹子透松に濃なは可あゝ哉

虹

虹の根や千船ちめて錦乃帆言初

弦小セも野ハ花籠よ秋のね

霧

晴間から海うこのはハ霧の海

木のる暗し霧乃網也目欠付より
板橋驛 舍作

ミラシ煙

進食せし里やゆくまゝつらふ
木の目にゆく和たる里は煙がれ

俳諧而形集卷之一終

俳諧而形集卷之二

東都 解庵 皐月平砂 著

發句

節序門

立春

井の水枯今を之教目小喜立ぬ
古詩曰水 吉無古今

ちきわゆくと又巻くも節のちり

流き流く 長小候くふこありりれ

鮮初る水ちちくや波乃泡
同 初一

平沙行 節序門 皐月平砂

歳旦

天の戸弦使よき戸や明れ方享保十一年
 年玉やなるての花れひ同十二年
 初多川や町てるる山を續た同十三年
 佐保姫や飾は諸葉を上み同十四年
 機糸の従をちめや惠方道同十五年
 月日星宮う合点く家のち同十六年
 初日新ま川一番は峰の松同十七年
 若松と我を相生お乃誓同十八年
 弥く於雲より巻よ花の春同十九年

常盤木を人の志さひて千代乃喜同二十年
 桑の葉乃まきハゆるせ初同二十一年
 初空や夜を真名鶴の鼠色同二十二年
 天地乃おさふ寸切さやあけ同二十三年
 元日や情みちるら大胡床同二十四年
 年か重れ物おわれり千々同二十五年
 初春や母に笑へとから同二十六年
 年立ててもや末たの梅の核同二十七年

春口號出 于文章類 節序 三少

鬢さへぬ宿一川松加侍子延享元年甲
難波街之故岩代街

歳神の膝を抱へん小笠原乙丑二年
あゝにみるや四十の玄関侍き寅○三年丙
初老序出

横雲の田舎仕立や桑村物丁卯四年
寛延元年

墨加ぬに及ちぬ松や門のはふ己二年
寛延元年

福寿草 庚午三年
童乃抱や年男寶曆元年
未

まねく小寐言すまの雲 同○有二年始
蓬菜やその力にあゆ岡乃松 同二年
壬申三年
七曜の柄をて汲あんとす 同四年
甲戌

賜冠子曰 斗柄東
指而天下知春

文日や禮まらさき友村款 同
五年

唄ともに牝馬休むやの朔 同乙亥
初雞やをあるひをのら世乃寶 同
丙子六年

年いふてををいふる分り世の喜 同
丙子六年

節序三

きくの箱と牡丹の箱に後書州同

りつつか笑顔きつまるる かく志ゆきり 同

新那為舎五才初々夾を弄ふ

元日に流も替古そ人通マ。同七年丁丑 去年夏自

岩代街徒 於本二街

鶉の實をのるる我國乃春 同八年 戊寅

口僻乃飾ハ低一門の表 同卯年

旧年きさを凌けそ祖立翁の美精酒をかろろわ
そ厚情を謝して控表生れるに於んとす

蓬葦乃玉の井らまん酒猪口 同

も心住一家の前尔井るる居門遷るも亦

井有てまごにそををれはらもをかくりそ

みづものめれあにむわすけりち乃井の

みりあをーまてあきふゆなあ心あるぬ

み戸井乃隣がしを持鏡餅 同十年庚辰 去年徙於隣地

居を移すこと申さぬ案乃地找いとふ

ことあつそ乃老まなんる是非の境

たよもんや東西の店下歩移も幼き時の

そとさをわのひやす守とちりわなり

市中に耳の奢や表於琴 同十一年辛巳 去年移居在日本

西橋南之

牛の背を野山に見なせ宿乃春同。無地景
有水のぬいふは連餠同

江山の景は遠きをおめす席上の調度にならて
らへくもあつく侍もあそびてそくはひのみ
鏡臺の月をるす塗桶乃手紙去る次は
いへもとわハ吟拈の緑ゆきに記しめ目を
よめこそをせをるは

蓬萊をうむや机の一世界同十午

倉化して舎と成ぬ利を捨く侘を好む
ふ似てはこそそは女くくち寸天我はゆふ

南に向ひてまをちるのうたを敝衣の垢を恥
といへとも予先の埃小離婁の眼をまらす

正月我松葉を鞠ふ日かゝるはこ同十三年

修造新
成自娛

年試筆かけ酒を飲せきりされ今新に味しる

やちらた柳底了包むや屠蘇の酔明和元

梅飾は宿の末とあきけら同二年

橘の小春を系れ今朝は春同三年

水飴の糸冬乳総や去年々同四年丁亥

出胎
之意

三洲刊行 而升集卷二 節序五

元日故二徒于駿河街也亦欲三淹留而賀以春に訓深む言嘯同五年戊子。去夏西岸之宅罹災

吟拈乃おれてそのふ家居哉同

老を養ふもさうて事を省く先目を休め心を安

か、ゆめに入る何をもつ曆同六年

白黒の境立てや節鯨同

草の戸に規式とくよやとおとこ同

年玉やかののに告ふ業乃端同七年

萬歳

万歳や二階わす倚くもろ拍子

万歳や心をきくのぬ初對面

試筆

童の泣のもくばよあてちめ

雪山のときアも引雪は一欠

書りめや鷺毛に換カ一硯名

箕のうちちちらぬたからやぬてちめ

双六乃ちう出もまのあさりちれを

書初や亭らぬのむ松木塞在西岸作之

書り終や采女の歌を破ちのち

讀初

よきるやや東方朔の傳よりのを

福引附寶

福引の翁拵へや長々めと

ふくひきや車ちりの冬をこし物

ぬきをきや勝負はよきハ人まのせ

寶引や海士のすて草跡を縄

初夢や寤形しき夜の鈴

初夢附寶船

ちゆめや宙士の谷々種茄子言不盡

初夢の茄子は色や鷹頭巾言茄子

初夢の夢をぬくめよ布士下風言鷹子

を一つ拵めれ先に膾の筑波哉附魚膾頌之

初夢や名のなき山を我拵

初夢や曇らをも飢けはまつり不

えいも終や殿るをなりて古小袖

初夢よと鷹子はいとけるら此

手枕のあゆみろとすやたから此

初夢や船を枕乃時かられ

百貫八鷹ハと端を雲の霄

若餅

わゝもちや 眞負の神乃向誥

字日

面扶持の野をたてまの 敷祈乃ひわれ
たのもく久粘^粘は祈のり 崇小松かふ
よ知名をそ 殿守あちくぬ子此りの那

人日

花やうに糸をまてちやす 若菜か奈
餘切のちし居ちしむふわりの哉
姐板へ帯あちとるまの糸不籠

あちちみ乃ぬきまきくかる赤いそなひれ
すりこ木枝風を尾けけはなひあふ那
あつれうつ子餅もくしや扇形
你爪の義理にゆらまふ葦哉
七種此中よ鳴ぶを齋可苗
出て嗽せ齋ま藪の若様
猫の急七らさ爪をわきれり
人乃日や松を潜り古梯子

不卜續の原に不角松よりてその日とちりにけり今まふ及務て

松取て二枝や門の年おし

初寅 手若き猿も足あらへ番たろし

帳絨

帳書や田の字を尉の物後言田有口無口 牒とちやま留まりせの端たぐす

上元

まひくろも卯槌ならむや削掛

初閻魔遠く深川の水隈近く萱酒坊樹間表色

眼乃あこれよりの梅や登り残ひす

若惠比須

あまのとき禪あまのわのあひす

柏から金の蔓やあ笑あ

佐保姫

さかひめの業見あまの江戸をつれ

はほあまの馬鞍のさかあまの柳あまの集あまの葉あまの

房歌あまの佐保姫乃うあまの髪あまのの玉あまの

初午祭

初午やまけぬ風情の川向

初午やあまあまの疊あまのに杵乃音あまの奉納あまの橋あまの

初午乃数あまのをるあまのにあまの長あまの谷あまの川あまの街あまの

まつむまや奴を殿の侍りちめ

五穀成就と願ふ中不

初午やまけていのろを妻と葛事

を片むまや口小くハへは寶篋

名付せ侍やよめ入おの如し弟子

波部武るや藝にとり侍く腕をひ出

冬心あ糸や野風に片器の祓加ふ

を津紐や我子の猿手引てゆく

初午や草をけうられ雇ひ人

初午や神と現して侍らり眉

若流年満や淡きもあろき神の顔

幼ふや玉垣庭の以小柴垣

まつむまや及故とささむる兜の加ふ

初す由や宮う素人乃子にあまる

初午也安丹地ま誠を片裳乃上納岩代 衞社

まつむまや栖乃志袴ぬ五香取言王子 別社

けりあまや暖簾をかけて神加ら

初午や柱おまるふかく里船

初午や旅うら人お見せふ本

を心望満也指突志も魚の番

初午也 持糸也 ね 鈴乃音
 初午也 不思議すも ち 寄進物
 初午也 幾久と しの 月形
 初午也 菱や 尖き 珠の 草も ね
 名園中 麻や 菜も ち ち ち ね 庄州
 初午也 海や 木末 ち ち ち ち 仲人
 初午也 ち ち ち ち ち ち 鳥
 初午也 聞え ち 師を 猛^メ ち ち
 初午也 やい、ち ち ち ち ち 神代
 初午也 ち ち ち ち ち ち 福の神

初午也 掛し 燈を 天窓 救
 初午也 末也 硯乃 布袋 廓^ヤ ち ち
 初午也 ぬや ち ち ち ち 馬川 下子 ち ち
 初午也 獨活の 種 矢^ホ 金花 奉^ニ 納^ニ 後藤氏 鎮
 初午也 代也 白き ち ち 藏^本 鎮^二 街^一 家^二 城^一 氏
 初午也 年に ち ち ち ち 奥道 者^三 圍^二 山^一
 初午也 ち ち ち 吹矢の 金太郎 後藤氏 鎮守
 初午也 ち ち ち 見^ち ち 風車 言^ニ 玩^一 具^ニ
 初午也 ち ち ち ち ち ち 幣の 音
 初午也 村山 ち ち ち 目^ち ち 社^二 檜^一 街

まつまの七寶流し今氷乾

まつまの幟乃林錢の雨

まつまのふむと朽まぬ庭の山

初午也あつまる外小嫁乃金後藤氏鎮守社得金字

参り舟浦松珠や禿倉於重り石

初午也道をつゞく園の鍵

初午也珠乃居すも浜坂於上嶺南坂上

まつまの波やめくれもふん乃惠方道

は波武萬也飛石をて去きむし乃

田の水も初午めとむ小嶋の舟

初午也祢宜の厨に油の香

まつまのやみりぬ玉乃黒烏芋クハヘ

まつまの満也舟盛の帆を筆序

まつまの下也蠟燭燈乃一接き

波初釜萬也とも清むる水繪具

半信弱くや下向於たよ浜竹乃月

彼岸

大船にのりし覚悟れひらんかな

磨ウスひくを押スまハきき波存哉

涅槃會

平沙行 而升集卷二 十一 平尾

杯ちん言や儘子枕おさめ物
ねちん多や古小ひれふ寸天乙女
涅槃像卷をひと重の雲間の乳

陽炎

かちろふや毛腕み流くふたたるき

重三 桃 踏青 鬪雞 油花ト

霞から王母の獨味々ふの栴

ちちを世を美目小不こ熟和ま々
ふちめさき産安けきなりふ子の表
承桶に栴ちのらひぬ料理人

曲水ふ蟹の押へ熟ふそと我

曲みや草の莖ふ重硬

曲水や座を岩留のうけながり

曲水やちのれとまりに目附役

弱鶏や芥子とむせふ砂左傳曰季子芥其雞

降糸のかくまを鏡乃備哉傳玄賦曰前看如倒傍視如傾

けふ我むすめひうへぬ雞片と重

雞賣や市の紛きふ智妙わか

雞買や義理ふひの侍一車

鹿朶うやひれの電にま日浪

以灯のつひあまの市戻り
 野々せやるる体やう小菊を伝む
 落葉て幾日と飛羽の様うろも
 大姉乃壯サカリ使はくもひおふり物
 奈良墨子也りや雛乃髪かこち
 中多えぬひあ錦やたうかろく
 さちのーき男ふせけ世祭祭
 ふうささばむ子子ばくやおあろく
 雛棚や家例あうら驚はうら
 橋や其葉の實の敷雛乃顔或人造 右近橋 九

比那きて 都まの敷あ臺所
 秀雛やまろひーかこ子孫枕
 紙をぬれひ可れぬ袖の妙あゆかれ
 窓とみよ三日の月あ出あおわ南
 寝掛にちろけけさせよ裸雛
 うれえきへ友寐をかこーはくこのひな
 乳児をよ人目乃笑のちぬるひ那
 青婢子や雛ちかろぬ平仁面加て
 ひちの日や禿わすも袴腰
 小姓も裳吉弥むきひや母のひ奈

平沙刊行 而开集卷二 節序 一 日 三 少 歳

紫朶又尊のそろ子や飛那奈

一帯のそろ口きれ油さー

以奈多南やいゝに流さるゝ面ひとら

日那重経や猫の額小加らき笠

ひいそろ此黒みやひ赤る鏡山

を飛まけの君の淡貝雛尼せん言史林東

淡菜シクイの売を乃せーあむお姑柳

おろのちる白調度あふをやひ赤る咲

猿居てひなの口もさ乃るれり

心得て雛居るゝくり人乃妻

小野宴婦乃雛あそひとて西岸の舎に留らんとす

融町志て是とまういまの草かあるの心あり

夏おもほし日本橋をワッるぬたちまちあめそ

摺笑を

立とと鳥橋を虎溪に籠乃醉庚辰

玉きれとり野道の芝生小鼻緒摺言踏

仲磨ハ假名尔あてらん油花の占言油

汐干

賤乃女の葛西へ別於汐干江上三

梢小はへぬお、枕や汐干瀉

平沙刊行

而开集卷二

節序一七

平砂菴

汝およて犬をくわゆる 志おひのれ

今日潮盡キ車渠おむき江をなむも比目を踏あてん
汀よあるされと一程のえりの奇智三枚洲又林

海月をを安もておとちおあ本花の菊

力をあれもておぢりさまあしおひの那

一人あはきさるし一沙平此苔むし路

塊を島とくはあまき志保比加奈

雲脚を氷ののかりゆく志保飛可経

日をあらぬ藻乃枯葉み多志保比加那

人み多く人見うしき小深平哉

淑乃上に回辻わらぬ潮平哉

寒食 鞦韆

寒食やいに温泉壺の酒陶

諫いふ身と鞦韆乃をくめられ

也不入

やふいりを觸てあのおき隣のお

ゆふいにやお越ひるり閨乃月

養父入や葎に流なく普徳料

屋布伊利の一日いまぬやとるお

やぬの理や付あし修るく夢判し

出代

出かちりのカキうき雲如木二階
出うちまきくわの志をよきく日かふ

梅若詣

うきまねあまねあ日替すみと川
藩公や念佛を祝や隅田の道

浅草祭

いり一登の物登れ馬るやまつり牛

深川永代寺山開三月廿

護雀のち川杯をむくけ山流く

八十八夜

釣人の手袋あふしわす袴帯

暮春

ゆくち流やしのき楼船をさるる
鯛の目をさちるて雲乃なまり哉
雲を釋てきくあにとあや松乃鶴
拵く雲をよきむめけ青葉哉

三月盡

ゆきをほや玉藻を波乃晦日掃
正二月たききとのやよひうれ

春總類

又ぬるりあまやたなるの月見歌
 猶かをうしろあをせや琵琶乃子
 爽の日やさき程を鳥ふう寸らむ
 ちまらりののちのち伊勢に御用木
 雲の野新錦石きを和縫袋
 あらりのの飛紙をぬみわるみらあ
 春駒や仕合よりを河圖の星
 りきふ乃三羽ちうらに日ハ運
 月不にや釋菜とて宰予の徒題月寐

首夏

友来とや一をふるるるかつり咲
 續く帆の舟月星やう寸嵐

更衣

使者馬の心いさむやころもかへ
 塗物に塵ハあるを出落意の毎
 旅小居を頭巾なくけし更衣
 蟻腰や寸らむ小蓑やころも人
 毛のぬ乃八十瀬糸きふあをせこれ
 葉梅乃烟子小かを依給の那

平沙行 而开身卷二 節序 一八 平沙

子うゑて宵中うゑてあゝ阿を坊か南
 袷着てまゝのゝや室き南威
 あをあゑて袿をむけへふ机のふ
 出燭の身の引立袷袷の乳
 乳母さへを忠信とてや初あをを

浴佛

灌佛や茶の水底を天々下
 灌佛やありし禱物師の生記念
 灌佛の袈裟とるを合せ今ゆ
 又生れ終ふとる小衆生哉

二句遊海福寺
 建峰寮時作

春菊をまぐやほとけ乃むま敷く日

結夏

指させと月を扇を系糸な木立
 ふははと乃田草をいゝお夏花摘
 夏入てあぢれや禪の勧め事
 飯臺小在家ハなつをますれ今ゆ
 夏出もわや清浄墨と所所の傳ツテ

寶曆乙亥年初夏芝三田席嶽山常林寺に
 去く江湖真行有るふ首座守説禪師へ
 あふま妙とるを中おくふとて化行。二句

木折もろ小一復むすふや笠乃紐
藻の充溢ぬしや江湖のみをれ棹

賀茂祭 中酉日

半支の油加すふやめり如き

端午 菖蒲刀 蓬 同 職 粽 柏餅 飾 胄

蓬生ハあやめにほろし 新端如し

投入のあやめをあらん竹瓦

酒をまのふところありやほやめとさ

乳き根やかくとしこめぬ節の数

五分市乃菖蒲刻むや角太河 語 武 州 葛 飾 郡 在

菖蒲膏樽乃井柳の多たまり 西岸作

をろく多を酒債に添り菖蒲膏

宿札小引よせむすへあや沈草 神田 假 居 作

刈何との酔さめころやさう 酒

菖蒲湯のあまや月乃木賊山

菖蒲湯竹らう如るえを添白根のれ

三ッ打の組やうを添菖のた

豆蟹と伝えはるお菖蒲打

お引よひいてかちや葛藩うち

池名のゆれてはるも 印地打 並 菖

軒ちと乃陶を葺是守蓬か南

形又さ寸よもきりもど人出入蓬

合款乃系を森也てかこくや笹粽

芦妙紫よ舌めつろしき掾か那

あつろへ乃芦刈を平起たま記のれ

餅草に知られて通伝知美未加那

艸いきれわりのににおこ流粽車

二日路の苞いふろしきちま記可奈

智恵ろろへ粽を埒と崩まろろ粽

柏餅柳冬花を忘礼計里

かちちち上水をのわし末紫式餅並柏

雲みと寸葛蒲刀乃浅茨のれ

付紐の左もあろし葛蒲太刀

六とわりや鐔入かへ教葛蒲太刀

うらけよ青龍刀に安やめ草蒲刀

楔ますてうねくしきよ機杭

たの機一矢それゆく風車

凡ら数を写し孫の形ありのれ

河原付の家をた安ち寸のほりか南

鶴龜を産恙又安ろ人初結行を

幟見や黄石公の橋下左下地
葉柏毛掃や幟乃尉と姥右高砂
立をえて形御立ぬおのわ利の籠
乳花幸小節用をむき若ほ李系那

余所乃賜ひにわう耳を清めて

長すのら代守^トや幟乃鈴の音
款みさ人對姑のほりや赤子乃眼
繪の格小朱印か、わ、幟^並のな
女光ふあゝまかあとのすきるのあ
宗筋乃兵撥りてのふさか奈

くまのー^ト起^ト乾くか布あひ
舞むすふ^トの^トを^ト乃^トや^ト壽亭侯
片らつ身の数奇屋へむうぬか布彦哉
親あましく引ちまら新旁うぬは系
名あまなるまか不古小梅の小楯哉
牧狩に富士の干の^ト乾の布登り南
泥足そ乃之勢回極の如婦との如
波乃なき磯際片と侍うあさ哉
野原あゝの隅をわめ法か不望哉
縮緬乃勇くくみねあまかあ

端近の衣桁乃きをほかぬとかな
隈筵に四隅やちろくうふと哉
滄の柄をすねあるまゝに妙多の糸
加不去尺や黒き簾は夫婦は違
亦名乃波うら際やふふと廊店軒
沁るに縫文かめよ端午乃日

藥日 摘
斯りため山は當菜野に茶

藥玉

くまふまや長生乃して糸さむき

賀茂競馬

法寸枝を一日乃鞞や勝負於木

富士垢離

不二ありやおよままハせを法くはわ海

氷室 附氷餅

一丈小冬をまのせしむるうれ

似せそのくのち長法よこちり餅

富士詣

安の上浅くふやふむらん富士詣 日本橋上作

日次えぬ愛あをせをやまふて

餅尔物扇あくるくくゆー戸ふあ
不盡詣鳩乃海底はもり計里
くちあち小夏のちめけや布士信込社駒

祇園會

祇園云や角カド菴のく姑枕上

祇園云や柳の月を葉家かろ

きをん忽やおもをぬ通夜を辻固め

ねどんをよみのに守護を紋所

祇園殿御留守と蟬乃時雨加那

三の青飯屋いーく立くまふほとハ詣す

人みふそをそくにけあひゆる事お登の
まつあ毛那ーたけりむふあやへも炎天に
面を焦ー冷水の舌をわちけをアーまて行ふ
おの何らそひの氏子ちるや一まらに荷擔の勞ひ
をあらす寸毛此神徳のおまりちる人し

祇園云やとこ海うみの土なふ利

山王祭

神輿をや豎の三点まつあみち

暑

砂溪のさくを織おあひさぢ

酒槽を門の小かさゆき 暑き少水
 襟去てよをよきませ 扇あつさか那
 暑き日や海を埋ふ雲影 三田潮見
 去居せぬあゝ乃きちや 暑氣欠まふ
 一斤のあつさふも 萩や粒胡椒
 一足をかきゆあはきや 四寸岩

納涼

迂るま川そ途の連や 朝すく升朝
 股立をきみの先く 捲夕きく夕
 跡涼日を定規小す人よ 涼床 同

ひとの敷をきくみ 杏はや家此 前夜
 涼むおや草刈笛の 露ちる 同
 古き友の萩更て 通る暑、英か 同
 おのひあれを舟何 ちあ小涼 哉水
 出海をし涼まぬ 萩や高瀬船 同
 乃して着お岸あ 甲は 尺舟 同
 牛込乃暗如里 出海やす 同
 木母寺ハ入江ひ へてあ 美の那 同
 虚舟を逃そこ ちひ 高、三が 同
 川との汐風かあ ぶあ、足茶 同

平沙刊行 而升集卷二 節序二十五 五少歳

河端へ登てきとえし須く異哉 同

すくきや流りあむむ富士の影 同

狐火に山道にゆるきみ哉 麓

ぬきやの庭涼し支木陰哉 樹陰

涼き縁こめてや松の一拳 松下

壺坂ハ續あてうく人門涼 有幹類出干

崖端を上座る極めす 山亭

すくきや苔穿ちゆく秋竹の心

すくきは是代おす竹乃言

涼し赤小豆の安を依熊の革市

あ、志左や入みきれ多敷鮒目高 患眼

ゆきゆきおきれと涼し身頭巾 時作

土用干

踏形可く文字いづくや土用か

人形の頭を霜やとよりほし

まつりこれ論語もたよりち判本を

長持の安まふ軒や土用なし

虫干や文殊一幅すくり毛の

東叡山に詣り清水の堂あり供豆山嶽を干されり

ひかりや心付けは舞臺飛

泉附葛水

山水を人歩ましてや川古菟玖波
 酒誦のよせを醒はいつし
 助ある脚風追来る泉か
 行とけし新志水や秋乃底心
 塵よあそいちらのまゆく清水か
 唱者の日陰ハかを流志あり
 早乃乃口もさうく清水新
 志あるさへ心毎にかを新測澁か奈

ふとみづは隣隣中や志あるのより
 葛水に探てゐて片う茶筌かな

御被

思ふ事水にうてと歌みりき
 和泉式部哥たも物ことみ
 形代やとく此なるそ乃厄
 人為小茅原をあれし
 大勝にゆきとち溢保茅の輪の那

平沙天行 而升集卷二 三十七 平石齋

家つとくに人秋ハあしひ我まき川
筏士毛御我にあひぬ湊入中島舟作

夏捻類

打水の黒みをふむや夏巧箇

立秋

秋とつやむらき川をわきおき
秋冬きぬ覚あらぬ童小告ぬ老

初秋

すき人乃ためにきぬらんきさ此秋
初秋や眼尔たろぬ帆乃開き

そつあきを改をあふ新りと更尔より
文月や草紙をまゐる星を看月次冊子萬代閣開宴
高殊乃ちりきをへや庭の内

龍田姫

五知川行 而升集卷二 節序 三十一 平石齋

大滝ハ鏡立ありをのこめ

相州石尊參相州大山奥院阿不記神名

日初開至七月七日謂之初山自同

三日月やまゝ初山の徳太刀

七夕

七夕や寐ヲ夕ほとよき長半乃閣

七夕や地下の撰云乃歌はく

七夕は片きぬ羽飛ゆ協の糸

七夕や乃初と始糸を袋蜘蛛

七夕か加くまゝふく袖たけみ

片のもし此みらひをわをそおぬあを

は身せをな紙マかなや男きればぬ

うき草やかゝてさそふ男太奈八た

わのれ路を月おあゝよやたたあつ

織留いきりふ乃浦へ糸めぬあを

星合のろふミあゝせ替古鞠

星あゝや物陰むとつ志のふ山

星會に掃ちきりなり土の上

不いあゝのきとめや月乃みや二傍

ほい何起やよりあつまれを音あま

子合や芦のろよきと牛乃鞭

琴を立絳城繫き祭るに美を尽すことへも
未通女のたれぬ終宵のむ時あうら

かしあひや世のた、やたハ川の音
ほ、あひせたれてか、く西枕
星の夜や牛も思ふをすれつき
かしあひや琴柱をわ、く蛇の音
星の夜やまてうのらぬ備物
鵲の名をと時やあ、む、
音をう、ぬ鬼灯もあ、り、

木硯を小家にあら、
あまき、あ、あ、あ、人、星、む、
老尼のおあ、
口き、ぬ宿直ち、
此竹乃春風荒、
追お、ろ守、
あひも、ち、
立琴の龍池を飛、
並ち、ぬ、
あ、け、

獨若早をちりふてめ糸栗の乳
井枝借んちりのきむけ乃志栗瓜
かさくきや星を君とぬ片とめあり 並星
織むめやとーをなうを姑裁阿まま
きえかゝ 侍富士のくありやとそ一妻
使せよはくうわひめに女郎蜘蛛
まゝと背そあさくほ娘の名ハ片くめ 並星
一羽ひ投かけて君ん天の川
碓のら胡粉流をやあまた河
上り場と君ゆる岸阿り阿る乃加を

すまゝ一羽にさしの一飛やあま羽川
いくきひも目に越はくや河海のかき
あゝゝゝき飛を妙りけや銀河
あゝゝゝとあゝ 海をけりあ末加波
あま阿まゝのり一の那もや天漢
羽りきぬ 練 や機尔走へ銀河
かゝるき羽乃一文字引也あまの川
渦と見を蜘蛛の囲ちるへ阿弟乃加八
蟻乃巢の近さもあふて河
漱とこれをはくゝ 記 嶮 名也 詔漢 河並天

一雨乃烏や昼の橋洗作雨中
鵲鵲也乃を橋橋と称ぬ一夜鵲橋
影影を糸屑糸屑と称心心く
握乃葉に合せてちるは折句哉
絲絲並願

解夏

一夏とく揚駄も草の名るゆり
わくふ可即身布袋夜のわくき
それくの糸路ゆりや解夏日
九十日ふまれぬ虫のなくねか

法問尔牛毛自由り三田弥秋常林寺虎嶽山

王子詣七月十日

わきれゆく音無川やまつり此日有記類出

中元此名也道家一日の言集不始て人間
二季乃贈酬に及の生身靈附

中元の心不松乃木陰なり
傍糸緒をよりちるは伊きみ
子るるを蓬の葉の心と人ひ起るき
たちふれに箸を握るむ生身冥
わきぬく母あらしきと死生海

盂蘭盆會

迎ひ火也一間みと成すうすくあり
迎飛也を田舎ハ足運ひ免王于村作有記出于文類

夏水の泡とまゆれと一服を前乃世のうむ成へ

攝待や新茶なうりし祖父門
力を捨おのわ新虫あま高燈籠

乏弱の旅をわ〜ふや靈祭

見ぬ人新曾孫になりてやたま〜けり

馬おり乃僧よまのせよとてはつと

〜つ〜あり統肩衣や買まぼり

あちれきやま菰を肥と玉まつ利

蒲の穂を鞭ときく乃とてをばまつり

靈棚世膳のひつ〜をかり乃松

靈棚やと竹ふと高仏あり

玉まつり門又ち〜を食られ

鼠尾草や無縁る香の世ハ富ア

ちねすてを餓鬼の形や大文字言如意

灯籠の減も〜き世を乃末

角力

草すまふ一本松の名ハい〜つ

関ち〜りよ〜いよせ〜あるきま〜いかり

太鼓打あくるるさあある角力のな
寺僧て羅漢を拜む角力可那
きとらよ抱へすまふの笑顔加南
ほまのひとあをてふ恥なり腰の弓
風雲に雨雲まけくすまふ觸
目録のうらにかくあり相撲組
森ふ鴨よ一手習ふ角力取
家も入て世をわらえとむお撲を
印箋の手入かいくに角力とり
地引もを教ならぬ身や角力取

千賀を出海荷痛をゆのし角抵取
石船にのれ日もある能角力也利

踊

又合衣や酢貝志いの小踊の輪譬喻
裸身に習ひ込きあはるり哉
ゆくさきを松坂もすまをらわられ
意の来て窓をらさそふを能里加那
きをー里のうのれり岸乃をらあり給
黒犬乃足まふまもくをら梨可那
木戸あえ亭一人をら如ねをら里加奈

とり見や草鞋を打ておらり物
中よをけ躰のうら乃刀拵

子をたりに小園目目のきく音頭うま

花火

看板よ一あなくち寸毫かあ

志されて冬迄に根のまきを火の香

繼うらに顔又あら歌々花ひりれ

ちりきき乃花火やをのゝまあら

物顔や孫ありのさめ想ちなひ可那

漕あてる本は君や夜の花火舟

百兩を闇よあげうの玉火かな

瀨き歌々数にうさけは玉火かな

八朔

ハ鮎や漸し早稲を洗ひ米

八朔やお人をもとめて田の吟

十四夜月

待宵よ雲うら一たりやこの糸

まつよひや男を時あらぬ池の稻池不忍

海川多能やあくの底なる小金原日暮里

月をみて月をまゝ歌々二よひりれ

十五夜月

月去乃又逢也よしの謀

こよひきれ月乃んとくくの経いとは

と習や油祭たる橋此月

月今宵も所を憚禮不二農雲

く潜 里戸のゆりやこよひ月乃友家商

打ぬ初木の根よあゝ秋月こよひ

その抄りお心始的てあふ乃月

此神酒を岩戸へゆく流々あわら

かしのめ入る草をさしとぬ月

鳴臺におよき付くりけあ乃月

磨ウスをくぬ身はくをまねてあふ秋月

一人のふもとささめよあ濃月

おしちきて秋窓あけくりとは乃月

老を一人ハトナ襪せりあ乃月

袖下をああきる秋和今乃月

よきつけぬいちらにも逢や今日乃月

乃のうち此贈放せあぬ秋月

不ぬれて秋去のめ々わ計事濃月

酒振ふるあちち人よ々あ乃月雨中作

迎へ出る狗自慢なり夕乃月
人中を影乃とまりや茶ふの月

歌屑を春を以て拜く夕乃月

夕乃月又碎せよ響節

西日持て日もうとまり夕乃月

頬杖の立場はとめ人夕乃月

舟唄多地の美若おけ夕乃月

小舟中も茶へ居る夕乃月 言西岸舎
月影疎

志東に言き野もわれ夕乃月 日暮
里作

おち歯に乃昔なり夕乃月 丁亥年
歎齒墮

樹より歌を市の儲け夕乃月 駿街
作田

白髭の夜を乃夕乃月 川作
偶田

深川乃挑燈物め夕乃月 三派舟中
富賀岡祭礼

出むらえぬ宿を葛西夕乃月

夕乃月鹿島の日乃出沙汰もなり

も流漏 数も夕乃月 所繞
ちりり月尺ゆふ

言故柳巷上居
有記出于文類

桂男を夕乃月 童小

行き起る夕乃月 童小

尺歌おと居り夕乃月 童小

平沙行 而开集卷二 節序 三十一 三十二 三十三 三十四 三五 三六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十

負と子に忍らきくおろ月見加南
一色を遂ふ公不有又を也

あゝ侍さに行きみかろてろえが

堪忍の家路はかへは月見哉

みろか子の盃をむぬるをな

袷着て園を帯たる月見糸丸

落あまきと錢代語をく見りる

紙帳出て笈子よろふ月見如那

かゝく毛竹正も身野路の月見可菊

信濃のら来て思なると月見のれ

垣裏をぬき手にちのき月見のれ

洲の上に汐まの舟乃月見糸雜海口作

様立をむとゆ又よせく月見哉

越しくきぬと席にあが月見のな

良夜酒半甜りて満座各具尽るん事を以

破中の趣即奇玩の至極と呼ぶ

泥龜に花菱画く有るが那九竿齋作

おさふきハ座よまよへとも月見の奈

寸ちしを苦手にとめ糸月見哉三派舟中作

川筋乃太鼓志まふて月見か同上

ねむもほもふ帯る缺存元承れ
 名ところ旅童ち急はく夜又かあ
 戸きとひの追人もとまる月見のま
 舟着てあをいりうぬ月不加南
 舟梁却逆手みひよりな見草

廁上安ろ守枕上を物あそく
 轉上おめ
 かこくたぢひいそ吟するりみ

宿尔居て之をもとゆる月見か

むろ浴の素籠う向小明月や富士君ゆること
 駿河町ときこころをい地ふと青代吟かろを。

燈坡の炭俵ふ入りねをそわよりこちあつて人むちまきそを
 け秋やつれ家活ちまより眼あのを真をあらうとそをわら
 す毛むのひいてぬさあれをけをわてし香他例の始ふ
 立れ七十自前の人をねきて何雨の弘をとするに
 似るんもよりこれ古人の幽微をうひたうして
 老夫の顔忘ふ照し合するも清光に對する心の
 心をへりて眺望の篠北るをこみむ成へ
 町幅をふよとめてる月見か乳 丁亥 年作
 南の家塙に窓を開きて微涼をるりの便とせ
 もあ月乃始よりまあ好る家とこわちうくを

良友乃序彩をむらうの幸となりぬ待よふ
まのくまをけれをえられぬ地上も雲とさうふ
出まはわろしき城二よみの西ゆれれまもほ
の晴るをまつまてふと十文唱をかりひ紙ぬ其二

催きは出汐よりと葉丹尺可奈戊子年作

松極し庭子あめめてる足り那

宿又おて笛にちらちふ月又かな

月尺んと稻荷此木のる搜しる里

月欠むといそけを長し神酒の音

ぬるるま方ちとの空や様のは

月を君恋志をりや宵は尾長を

宵またの月又志らせよ京様を

あふあまて月尺んとそく楚人たのみ

嵐を毛尺又するの冬廊の上雨朝二句、之

手かく月乃品や月尺の蔓をささ

一醫者予う肩井の邪氣を療すとき二日すてふ

あまうの白く吐せしむ

揉め燃れぬらん客乃歌袋

所まみと信客菜をくあり月の芽

名月や夕日へそとけ樹この影

名月乃ちくめおちりやそなれ松
 名月かあのみき望みやけくむらひ
 名月之如くやく中子恥款
 名月やけの田毎乃あつり前
 名月形影あつなくや風の棚
 名月乃ち夢ら朽くゆのし竹の蟻
 名月如巖の肩の蟾居らま
 名月や額に醒舟あつり
 名月の園おつくれ寒苦多
 名月如ゆれまきみ入爽の色

名月や牛乃昭王の音ちのあ
 名月也志川まふ顔に舞北事
 名月如まゝのひらめゝ次鶴の窟
 名月や煙をむすふ馬の豆
 名月也眩蒼をたむ眩片のひ
 名月之古き詩歌を胸乃旁
 名月や羽織一ひかてん海糸
 名月如きあつる海糸を著け海
 名月也為ふて古紀物かゝるも
 客我迎て魚なり

名月や人尔不海乃荒御作二

今宵月雨降て奥少く不影根を移さ
お林のまより白基石の扱物をまきまき
これをもりて窓席乃人をまきまき

名月やる初底もて湯水の使年作卯

名月や交ておめさまをいささか

名月如岩う門波の牙二寄碁

名月乃友や野宿の伊勢系

名月のもを奥あり海表遠望

名月不交の低はマ汐らも

名月や目よ貯へし山の上

名月の出汐にかたれ硯水

名月や交てきくきむ櫓のふり

名月也心の隈を波松系

名月也我箱なれを素帷子

名月や硯あらしを雨雨之月二

放生會

さく枝乃鳩もいさきて放生會

米虫のすかたのくや放生會

牡蠣むきの秋はいとまや放生會大川舟中作

餌まき水や卵を測へ極せ舟 三派舟 中作

駒迎 附駒牽

サカカミ 逆髪のおを櫛の齒狗むへ

鬘原乃あ皮もふまゝれ丸太坂

こまゝひきや伯楽むとり又くしのき

駒牽拵事高り顔や大津馬

十六夜月

いさよふみや髪流らみさ寸月乃顔

ひきまゝ庭や斧のりてむ顔かつらかけ

十ら米也昼とぬうちお持らぬ物

十七夜月

立てまつけきや小窓の袴夫

残暑

外事よあゝあゝ秋のあつさおれ

擣衣

指おきを姪もころそをうい後り

候争に衣うつらん月やとひ

絹木綿持ちらふ志らあゝきぬこのあ

踊やむ人をあちひよ小鼓

きく人のおもひをこし 過 砧かな

重九

くふまて此菊をいへる重九の暈

けふまじり質氣不守るれ兼結をふ

綉オヒカケをその英よふ乃きえ

万倍の露此命り今日の起る

仕入して様片をめたりをふ此きく

おし級海世ハ秋形銀七日の菊

市と城果箱をうきせをふぬ結き信

香をちり寸々乃氣浩や箱の菊

をさ川系ハ鄙ひたりをけふ乃きえ

種とねく名ハちりめを登々乃幾久

掛わさ寸屋根を碎らむあふ流きく

千代をふ流狐も君ハ銀々婦の葉

おすへりの菊を九日の流みな

し日のきく屋敷ハ星乃位哉

菊乃淵なる終よ九乃九十川

十徳結裕を出さり宿の菊

あらしきくや紙燭をりてを礼加へし

九日結袴者王弘く使をり守あを一瓢乃持系

あらしや

白菊や醫クシの無垢を淺黄隈以下寄
 めれてかき戸や賤の女の菊重縁
 菊の日や遠く遊をぬ花ころそ
 塗桶をちのり物忌ぬ九日うれ
 めつらしき九日小袖や人乃為
 我袖を袖よと相むぬる葉
 枕縫へ九日の菊ははしわく
 泡盛にぢむくや菊の花心以下寄
 菊の香や酒乃齡ハ合せまの
 露さるる小酒阿波家々小乃きく

菊姑日を君よそや下戸の控屋鋪
 片白の酒匂もゆるしそふ乃菊丸
 酒忘ぬる隅うら菊の泣やみ哉
 刃を恥ふ足言蟻や菊姑宴
 切屑の葉小酒安子樹屋乃興
 玉を乃人貝盃小今日の葉
 白菊や破醒の目扶ゆきところ
 酒待て菊をかむ噛なり草の菴
 加ろしそ葉折ぬや酒探ひ
 樽買を糸にうらせそ小乃きく

平沙行

節序

平沙

隙をくふ駒の毛色や栗節句言
あ引乃を立はくむほの雛言後

九日の賀のつきて橋の五の訪入一歌毎ふさけ
さうへけるそのほとねわつりあはれに碎傳れを
祇壇のわらわ己のものとすわ懐中に酒消れを
れハ梁上り糸袋をたろ寸

葛を湯とふれうら加へ葛葉乃水辛巳

壬午の夜時令の気おやうれく痰嗽をやむ
申十日あまの漸愈てま切ふあひぬ医生山崎氏
乃功効を賞すなり

菊の香は清肺湯はきく目うれ

日蓮御難日

油不とたを川人なり胡麻の餅日蓮上人
報書新麥
一斗たうんあま油のやうあ柄又
外有妙は蓮華後と回向り

十三夜月

のちれ月夕飯もちや三笠山
栗虫のあまへおゆわ乃ち月
あま色を去のひなわあほの月
茹物まゆらきりありや後の月

小鏝乃目ハきくありは若く
 うつせきや雛ハからきては乃月
 鶯のちあもちのち此月
 くりあへ寸待青まへんはの月
 鳥籠は栗鼠の貢や此はは月
 鐘の双此こわれやきてやはの月
 片浪又楫とる妻やのち此月
 推てよき門もあらんはの月
 箕の内サビにみれ出ぬ後乃月
 あくくき寂を付くはの月

少侍ちをいちぬと戸やはの月
 たのさを披きあよちや後此月
 念点ゆく秋のさあなりはの月
 綱ひくぬあ潜かて家や乃ち此月
 器のと寸米ハおろるやは若月
 萬事尔先手拈きす乃は身は若故志
 古川又水のくきやのち此月
 市家の壺止て暫閑を
 目覚しのま極ありのちの月
 形糸の片伽いけるや若く此月

宿舎の臥拵一群はさ乃月

山をうし蒸てきてなせのとれ月

是代の目かろ酒やほり月

あわの系木末のわをせほり月

まれ人の面戸ゆすお後乃月宵間雨之故也

灯明を屏風つるいやのちれ月

元服の隣高らほや乃知農者皆

低みもを似るぬ雲やほり月

習よりを造る影やほり月

木賊をらまるとさき磨くは乃月

福のよる人きくまろやほり月

欠目をと波にませてやのちれ月

み裂て恥る小歌やほり月

錦着て入や二秋の存れい乃

野を教よめ夜乃有やほり月

みらぬ雲よめと秋の月やさり加ふと

家うつまの秋文をのちれ有えうか

行くしめやほの月見時車坂流士風

二夜さむ葉にちむや十之夜

橙の照ちりるり十之夜

これよりしてそのいそぎや十三夜
 山ハまゝ青皮むくらん十三夜言蜜
 入るこ此降とも起よ十三夜言雨
 人の尾ハ末に去らむや十三夜言杯盤
 十三夜饅頭のわいハ菩薩のち
 月又よき瘦かゝちありきぬかつき言芋
 二よひハを義め山芋や雨の月同

神田祭

青まつりや神の田守此大矢来

神明祭

而桶乃ふくすりな生姜市
 生姜市と會ふそのまゝ言
 儒みても多くとるへ一言生薑市並言
 紫生姜ふとるや竹のみやこ鳥言場橋
 秋夜附寒
 秋乃友を忘れとや寐せぬ我ん
 小秋中や書を積かもある宿の秋
 火小焚て竹の音きく物言也

秋暮

ゆく秋や目に尺ぬ浪乃おけり

丹墨本流のちればめて秋のわぬ
さひりき紙より途一々も秋乃々礼
なく牛の森入か、侍や河き結言
大破へ晴乃ひるめ一夕のふ

九月盡

きくならぬ橋の園や九月尽
腸又菊のうらみや九月尽

秋總類

表ひふ秋ハほとよ一市此菴
嵐さへ控てらるちぬあふ身此棄

立冬

小ゆらや家居尺ちやを菽から一
初冬や志一み便不朔日影

神無月

産神に鰐を流りかよふは起
雲路とハ字てきりあき一のみな月
まらあのか乃諏訪あき一神無月
鯉ハまよと速ひりさ一神の様

箱根とて常毛とめ一ふい

鶯乃後又月日や神のあき

あくら木と脂の流るゝ小妻うれ

玄猪

萩乃戸の落し子片くむおのこゝろ
殺し乃子やおのこれ養ふ三

爐開

ろひらきや火のふかめてみれ
炉むらたや志者にありし手斧打
煙冪まや絡にや片くゝ赤捺の形
炉よりふて田舎ゆゝや骨此肉
口切小魚揚の魚やせせり

くらきりやまゝ奥もえぬ濁乃色
志らるゝやあゝく悪小挽茶買
神ハ留古炉跡垂し阿弥陀堂

達磨忌 五十月

達磨忌や檀家到らす僧告は
くもるまや点くおぬ不心乃眼
達磨忌や鏡を教方の鏡赤し
たはまゝ不掛しハ絡あり像もく次
を養ふや杖くぬ猫の無一物

日蓮御影講 三十月十

新綿乃初尾又くあり所新儀

數珠切と人をそくちせかめいかう

富士川又ありぬみやおめい儀

いと小よる草花の志がや水先いり

今乃身ハ糊細工なりあめいかり

灯のいさをらに浮やあめい儀

藍尔深む波喜井の法せぬ教儀

十夜自十月五日 至十月五日

腰越乃芦迄疎くや十夜はき

澄の不ゆ月や十夜のあらし世鉦

今後乃撞木も君ゆる十夜のみ

町方に力を持僧の十夜は

うらさの伊まゝ罷なき十夜か菊

十夜をくくろ利より世百僧

惠比須講十月二日

お殿の菊怖すかあひまか

我笛書に丁子りらやを以酒う

色揚て客といちねんあむすう

月志ろ小壺を付上人夷講

きかろ一客を忍びきをかりより

和詩

草の戸ハ武士の酒なるを忽以須加う
夷誨一のを打ちやけりか

自織自耕其功力を著る今日の珍膳莊園の庭了を不待

ををたる寸あふしたのも一をひきり

顔見世朔一月

顔をせやとてを贈ハ屋つー事

のほろせせ遠い所乃新世帯

白みをや人ゆりけ人の新

か不愛勢也誰の衣裳も神まうせ

代はりのハか不尺せを名は赤子可れ

顔を歩を足くおなのら此世法かな

柔はえきらみや希ハ初又居は姿

うかろせお呼をひてまろほ乃毛

吹草祭八一月

滔打乃糸と忘れぬ鞆の形

空也忌十三日

大津絵乃鯨悟教や幹きり記

風まけの荷ハはろになりちちた身

一藝の昼をむりぬちち叩

逗留又なれ汝も土産共鉢敲

冬至

朝起乃心ゆふま熟冬玉加ふ

十一月十五日祝髮置袴著帶

髪をまや人又勝山むすおまて

かみをまや白髪に湯の花かつら

帯紐や雪をそもをくま乃紐

袴系やきれ志子父のあさのり

はうま死やけそ死んを肩の上

をの南着のゆつて長き指扇

大師講十一月二日

蝇去て止観の海や粥乃恩

寒寒水角寒念寒佛

十景を唱へうしなふさむは哉

赤繻乃鼻はらうと哉寸寄さ哉

小風や冬よりちる馬を空乃也

色をら小玄実の松や空是廻

あしをら一陶あま空乃あ

寒声の及故なま冬荒畠

空を茶の露ハあしをら

あしをらあしをら枕上に絃歌乃声をきく

あすすくにぬかん事をきくす

寒声や雲井もわすれすくわく甲代岩作

雪乃水野見の知行の地乃れ

白木綿圍よてまねやま念佛

冬古毛里

ふゆこもて竈の前乃机乃れ

方かまへけあはゆみ垣や冬籠

わさられと人やみあらんぬ托こり

煎茶のよあせまやふゆあ母甲

あくろよく氣を蹴や冬こ業利

あゝ漏屋ゆを傘正せ冬籠

たまさりに魚乃光やあゆも現

冬總類

寶衣まを壁おとなりや冬擁

あそころの葉をふさぬや冬景色

一面に深をえりて寸冬田日暮里眺望

冬はねやひ杯と暖はたうあらし

靴やうしろすくは消とこ海

柚子の香や甲カンよあさる餅茶

おもしるの三味線列深里杯

事納附臘八

あらしはあ、我カ籠耳やすおさめ
 完とかなる籠や芝居の事納
 年の矢よ星を元夫乃うも此空悟言明星
 曉や悟らぬさきの雪くらかり

歳暮

竹あらし尺八交年の留譬喻体
 とめこかし春を隣乃批をさき
 酒有て年れまけふを開紛れ鳧
 るいりの名人質氣まくれぬ

同丙午 同丁未 同戊申 同己酉
 同庚戌 同辛亥 同壬子 同癸丑

松とあしや大晦日のまろけ
 ゆく年や立ておさまり轉け白
 あふ人の玄似をあつめて沙走式
 一月を梅に阿つけてさしられぬ
 試みに沙乞の松乃朔日られ同甲寅
 年の暮驚ハ逃ふあゆみ加那同乙卯
 大とーやかろりも翌の焚ひき物同丙辰
 すしをたやを江表へ日枝たろ同丁巳
 拵くぞしやとの仙人乃さりお同己未
 ひろまぬを身にそふ数やと同此豆

同庚戌 同辛亥 同壬子 同癸丑
 同甲寅 同乙卯 同丙辰 同丁巳 同己未

燦掃やすきけいろの落ハちる同三年
分別をど新棚なり同此暮同

慈母の長生とよきて年ちみ速ちるを流す
春の系係とちり母にきさのせり同

天地者萬物之逆旅日月者百代之過客

務ち一那幾行き也同初十二月同四年

淡合に出子純志ち乃孫か同ら同

小狐のあどそう川覽六州同條小同鍛冶同

又傳小惠方きくなりすくちら同乙同

行系やちくもそ埒の一重垣同庚申同五年

淡菽のいくいおれちや古曆同
志らくめをほめちや後の秋目遠目同

年棚や春か近よ流清鈍辛酉年保元

歳と禮とくうの款や猿乃夏衣同戌二年

くわきれちき習きや思案橋同

金岡ち捨け如末の冬く同癸卯同三年

きぬとちりその外ちつむ羽織同のち同

餅粟をきてゆく延享甲子同

市すきて仕こむ物あり菜旦氣同

歩歩のきあきて良の一夜同乙丑二年

笛吹く戸の竹を吹くら 敵也 煤拂ひ 同

人為り狸探いりし 沙走可南 同

鶴の毛を宙士 珍古急やまぬ 配 同三年 丙寅

うゝを又 勅を帳やま 冥 同

七ツ子の小身にまきむ 志を 糸 同

生蛸乃 足をこまぬく 海を 同

あゝ 浴海 女史也 夕 昏 同

師を哉 家来の浴 菘芥川 同

くゝ ありとを鼠の 罟 見の 同

市中 八目 饅も 梅 又 加 奈 同四年 丁卯

きくも いて 瘦 腕 片く 多 膾 同

聳と子に 謎 妙 希 て の く 遁 師 走 可 那 同

同之 年 十二月 廿八 日夜 六子 醉 て 路 路 に向 小 羽 織 の

を の つ づ 脱 去 して 隠 する 事 あり 寸 寸 子 菜 四 十 一

厄 に 遭 へ ば 厄 事 を 忘 れ ぬ べ し 治 事 とい へ ば

減 ち 羽 織 なる 事 あり 口 厄 お と

たる 子 を 野 の 空 ごと して 食 乃 尊 同 寛 延 元 年 戊 辰

を つ づ け 日 を さ して あり ぬ 年 忘 同

顔 志 すら も 褒 義 あり へ ん 厄 拂 同 言 厄 年 之 無 事

歳 忘 かり 執 柄 あり 割 の 者 同 二年 己

雜喉賣の平目きふもむ河を哉

同

狼乃おらりあまゝてさゝらぬ

同

餅春や八景好の雪月花

庚申三年午

乃をけぬふ片隅なむやと久礼

同

師走持と云系又出流志をす

同

両面尔茂奴久を禮登也祢ち若人

同

飛梅の根もちひ付て葉香

應旦調之

需祠

用きりて何をよ深系入江

卯年

辛未

臘丸と書るもまゝぬ笑ひ

同

逝年ハ拂へともハ不二乃峰

同二年

壬申

此勞之を我世ハち物そ化の皮

同

初くそ〜や女を捨〜大女

同

日くにきののよ浅た志を次哉

同

鱗のひかへ〜おろり〜の〜

同三年 癸亥

狂を以取もみ紅乃甘〜や〜

同

母衣蚊屋の内を〜のりや煤拂

同四年

仲人ハ膏と詭い〜学〜

同

志を以取〜は〜路も〜

同

么乃祿日の永〜乃多遠

同

枝乃の何を此也書馬はらり

同五年

乙亥

遠山のをろくを仕ふる跡を此同丙子六年
 所也同此歌の核する志をきこのれ
 有松乃長る自除やまぬらも季同丁丑七年
 さほひめや麦の師を又由縁僕同
 男めく朽とこり初乃は走哉同
 復の子にきく少毛あらし重衣配同
 皮衣きの松を囲ふやせし木あり同戊寅八年
 此出るハ乃侍そ何きの物ありけ同
 浪家時しくつて志を寸の柳同
 餅搗や扱もあさやのに粟乃毛同

我事と徬目あはなり季のくれ同
 くせるあ松にあやま教師を築同己卯九年
 たるて世の口返答やうしり同
 極月や心尔着する笠の履同
 六年や十三経のちし買同
 賃餅は腰をぬしおせい峠同庚辰十年
 ひもせをしらもわきわん廿こもえ同
 讀ちうしおくも紙あり歳の高同辛己十一年
 一日の国尔巻へ志を寸の夜同
 狷の祭支度や思見乃地同壬午十二年

谷からぬきや志を次の野うとひ寸 同

山青一春まつ中の本よその 同

猩々の酒屋を学へと一乃市 同

節季ゆや宿又いりぬ古狹 同 癸未

市に出ぬ樂や師走の銅盃 同

年のおや秤乃家をありひさこ 同

かさりらむ見や片陰のをれけり 同

ゆくひの手挺や冬帳乃一文字 明和元年甲申

今す我指といちき志のよや寶糸 同

ろくろくあらしをせいてぬかくや漬 同

力勝るの登もいりり 同

まおつや及して嬉しき市の棟 同 酉二年

片よれを倦り業や穀切 同

花いけて操すさら一六之十日 同 丙戌三年

長負眼又淑とやとらん 同 のくれ 同

蓬萊の浮巢やとりの市二日 同

賃もちや谷あをふり 同 丁亥四年

おきろく時計の掃除よのや 同 こ

師走氣を立ち 同 りや酒乃泡 同

鐘俵や和布刈の鎌乃入ぬ先 同

俳諧而形集卷之三終

俳諧而形集卷之三

東都 解庵 皐月平砂 著

發句

地輿

地

下萌乃起て胞衣とふめらみ加乳

地の思を祓る煉時不忘れ芥子蔘カシ

山假山

荒乾る毛花めちさけよちなき山

縫入しやまみ試さよとち柳

帆ちくらき木立の垣や冬枯山
築山也とまらぬ蠅ハ雲の鳥

峰

石をきりみひる遠目のさむさう形

洞

露のそれうらみやからの大津壁

岡

為草也師乞むるをぬ忍乃道

杣

松山也ひれふは領巾
こころく麻縹也

坂

雪解は杉冑や坂の横鑢子マスリ

谷

寒色の中おれ折むくも深谷かな

水

秋もやしあまにきき桶のあ

水船の雪やみりさ水動のま倍力

ゆく水や紅葉をあふ水深あ言ら流

浅き石と足首痒し水此言春

沢水も下もえたのふ小雨水う同

春雨や緑の微塵池に涌同

古寺や新く見まさる秋乃み言秋

水如ねく安をれや橋の涼を言水

氷附水柱

水屋のらをこひあしり初二あわ

耕の汗やあり凝んを水

二日目も碌もさ川ふあほりうれ

根に裂めちるまふこり雪か菊

わくふも役目のかく海こほありか

一浪なき泡のひける言本理系系

狼乃のこけあけしこち李可ぬ

わらんを氷と勝や脈ところ

裏白の葉も噛片くや露も

うすらひ也茶包みし紙乃皺

欠落教あたらろしき流らかれ

其家のひつみくしゆあつ露かれ

辻堂の障る人な支那柱の菊

立枯の杉も身居乃銀舟哉

ところし通樋かき免赤はるかち

束ゆんとすれをぬけ出ふ氷柱哉

四色の水柱や瘦ふま習子譬喻

海

海原や花尔ちあま乃一くもま
百川の海目石をまや春張海

江

かどくし水入江や加布流風袋

湖

水海之ゆけを離れく沖と厚

潮

初志をやうしろの山をひくへ纒

浦

まき水く漁灯又あまぬうらけくま

磯

かけろふのくくねまあま磯波

洲

まかれ海乃めろ及にけくや秋の汐

嶋

遠の志碇根ハ孫をらむこく

茂み阿る千島の外や笠烏帽子

瀑布泉

すくしきやちるへぬまゝに流の糸
木わらしや葛カヅラ小むせお噎滝乃音

温泉

一道に病氣も春のいてゆるま

雪ふけぬに枯ぬ茶の泉かた

井

開く井に夜も探てきけ水の音

池

塵塚の茂と子池の入江の那

沼

かくれぬ乃存又みちひけと挑灯
ぬま水のたろぬけの糸動きりし

川

美芝や野川と道と阿さあつと糾

石

いつちゆく石の鑿あと冬固扇

涼みられ大破砂利を常五色

沙

夷の日尔章會は文字うはいさこ記

國

うぐのち此阿を月あろや秋城しま

都

寝をわしきやと乃春の申政に

辻子城さひ突抜のそくを依日くれ

城

疎山也喜をきたるぬ草むしで

城下を残雪くらし木賃宿

市

ゆにあま深秋や市女のすまふくら

里

ゆうれや一さと急し大綱戸

野

日盛乃敷又又ちり地野中如か

夏艸ハさ大路ノし結すそ股式

林

ささきれ又松木宿尺や里林

園

柿餅も名あて歌人乃家の葦

島

世や勤めわらひあくら此山をけ

平沙刊行 平形集卷三 地輿 六 平砂齋

道附徑

妻も月七つ此乃の泣押つ
沙魚釣の切そく竹此あみちる

橋

手斧目を花さけもろ持丸本は
岩橋や交る雪昏の友みり身

關

藝深し関の務ふれ管さく程

地名

山城國

男めく山の突ひや少く舟八
臥猪あそ床益や谷のむ山愛宕
ゆく秋や葉をあそくこの螢谷游

大和國

零ハさるやまを廻るふ足ぬ所渡野
谷々お待と熟そのさかり北野芳
醒よりの流をあそくや奥乃花西河
流小かと為ハおころく系衣土久土久
之清水

攝津國

墨吉の墨繩すくく淡路島住吉

姫松乃乃たしちるよし十三夜同
日小片進ては侍な梅のわのみどり同
宮片この家筋いく代松のむ同
布引の滝をぬふては梅乃針布引

伊勢國

いせの宇治錢紙松毎のちう流哉五川
真又又よ二見乃月を千度かと浦二見

志摩國

日あゝそのよくあいろぬれ美奈哉伊雜
尾張國

一短の名を吸續氣霧於海濱宵月

三河國

一雨をまひく志傷しや鹿子百合吉田

遠江國

托りきや茂との事々を朝見
松風を樋の音よきけ破新居乃十景有中
春雨や淡名を濱乃名取訪十景狐中
夜雨

駿河國

宿とりて厚や田中の城は月中田
板枝乃酒よひく流や又月藤枝あめ駒

山足を繞る家斜不連なりて函也

若草や不二の毛毳一かちり富士山

峰多八葉にわかれて東西の字をへて守

根ハ四州まきこりて南ハ北境折まをり

出るのちふより系ハ正而して甲斐のう

ろ新ハ益國の格ハ傳ちり一とまん

倒り元てのち休や夏ハ同

不盡嶺ハ零置雪者六月十五日消者其夜

布里家利とあるも 東郊ハ山王ハ清祭乃

ハ一き限ハほうちまきれけすをり

のち都にすまう一里にをさひちりける

甲子ハゆそ所まらら也布士乃山同

物事ハ糸より出る也宙ハ部同

相模国

年乃波ハ掃除ハいぬ志をり江島

ホ分の浪也こゆるん雪乃ハ同乙卯

四日雪ハ史林乃核核をおひ

鶯の肖を志ハ追平言箱根山中二

東都

枝道乃花の木結根や橋柱日本

擬寶珠の敷をふもや歌巾連同

白彫や笈此日さし乃自分量同

裏に牛四日の桃さ寸万廊市四日

橋ハ月木更け舟や膏寐かち江戸

目小量侍斗概カキ外のもし此ゆき言一石

橋一覽之景

竹河岸や花ハ針店橋の浩京橋川源氏物

乃ちゆめ此片めなほ花莖に我竹川

ををゆめせめささくをん櫻めく三橋〇

三ちしや月の波間あけや記櫻めく三橋〇

在京橋東二町通達縦横北日彈

正橋南日真福寺橋西日牛河橋霞むら関路霞

一ちしや河走おかしよほしの山星野

本買の冷みのまぬ山海通切

海又入雲好れもとや水車廣尾之長流

長南の雲りよまむるに此花高輪魁眺

若艸や峰よ菽あは宿の門峪山

二乃をうらめ山色や櫺もみち御殿

水との矢口あ告そあきの凡郷六

調布にこひしきやな越川玉

也興一 三少哉

享保丙午年六月四谷細井沾郷君の許りて水回沾徳
 の百箇日追善の一集得されども不支師もあらず
 いきぬき地を名あちやあれまかの君中庵の
 五十まで四谷をさうりよのそれといふをいひて
 年三十我も冬をやし四苦瓜 先師の白小
 西不ちや門出の枕よみや瓜とありしも
 け時々續句ありし

芳立て物なつうやむひる
 け二里の別れハ霧が海邊の宿板橋
 一ツ巢又曾子出くりかきき
 吾妻堤
 宿板橋
 聖堂

さらさら後木管路の馬林をくめ
 上水も音ぬ雪何ぞ林の橋言小石川
 蓮切や多もいぬ池の奥池不忍
 隔た敷をむりあり思の花見かな岡向
 水神も友をばりせよきみ川隅田
 さみ、袴糸橋場の浮洲わきれきり同
 水音小納涼もすけ社牛島三
 いさり火に火神ありてや舟乃月大川
 入船の目あてれ早や江戸橋同
 生海苔や弁天沖へさそふ洲崎

三ノ下ノ行ノ百ノ形ノ其ノ三ノ一ノ一ノ三ノ石ノ非

木場守に梅の雪竿もさめたり木場

うらひすく梅をうしろ小五本松小名澤

漕人老牽杖のそまれ亦の霏同

七分鳴て又番の地籠りすとも靈巖

涼むとま立改教る親みはく晚鐘

下總國

汐汲弦多あり向や一茶くも里德行

近江國

相坂を針屋のわこけ清水加ふ関清

入おや出世冬月の柴屋町言三井免鐘林

跡梵王宮。叡岳雲連道已通。莫待龍華三會曉。六塵七絶暮鐘中。

春乃夜や雨哉妻水ひと川松夜言辛崎

浮花を比良のかまれり日枝ねる比良

鳴る海や秋を海の琵琶ふらる湖

乃奇結うらひまハあし竹生竹生

美濃國

宵の蚊をふすへ高隣むつりや江濃界

孝はみ試みそゆく志ありれ養老

信濃國

落書は残へてすく木曾のち

三ノ下ノ行ノ百ノ形ノ其ノ三ノ一ノ一ノ三ノ石ノ非

下野國

尾のふきを舐てや龍の年こそ里湖二荒

先師室の八島を影てらるる人の踏分魚

まいきれと言外かの烟をこめて玄深し予

ま境を及乃沈思す知此化より薰蒸す

野歩仍や勞又ころる人息

此外所題名區大邑所_レ事跡分_レ入神釋

奉納圖畫山水人事送別行記遊眺及居

處之中

俳諧而形集卷之三終



高水四ツの表

カチ方一石 異作

應好屋之 而形集三卷

高水

送文

